

転載にあたって

- 1 転載にあたって発行元のカルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社、著者の岡山喜久治氏のご遺族の了解をいただいた。
- 2 底本は縦組みのため、漢字は算用数字に、括弧や記号は横書き用に変更した。
- 3 精神薄弱児、白痴などは歴史的表現として原文のままとした。

(人間発達研究所編集委員会)

【源流解説】

「ちえのおくれた子らの作品」展 (1955年)と岡山実践について

山田宗寛 (立命館大学)

Email : myr22143@fc.ritsume.ac.jp

はじめに

本稿(源流, 岡山論文)は, 日本を代表する美術雑誌である『美術手帳』(5月号増刊 特集 ちえのおくれた子らの作品, 第7巻, 95号, 1955年)に掲載された岡山喜久治(1926-2022)の絵画指導の実践記録である。

『美術手帳』は, 1948年に創刊され, 「戦後から現代に至るまでの日本の美術批評ジャーナリズムを牽引しており, 現代美術を専門的かつ商業的に扱うほとんど唯一の雑誌」¹⁾である。これに, 戦後間もない頃に障害のある人の作品が取り上げられたことは, 美術史においても, 社会福祉実践史においても大事件であるといえる。なぜなら, この雑誌で取り上げられるには, 第一線で評価される美術家であることが, 明々白々な前提だからである。

筆者は, 岡山から, 表装が経年で傷んでしまったこの雑誌を「大事にして欲しい」と宝物のように譲り受けた。今日では, 障害のある人の作品は「ART-BRUT (アール・ブリュット)」²⁾として評価されているが, その多くが施設での取り組みから産まれている。それは, 社会福祉, 障害児教育の実践による賜といって良いだろう。岡山は「発達保障という言葉が出来る前から, その実践をしていた」と何度も話していた。その一つが, 落穂寮での絵画指導であった。

本稿は, 美術的な評価を解説したものではなく, 発達保障実践の黎明期における落穂寮の絵画指導の取り組みを記録したものである。

解説の前半では, 展覧会や障害児の絵画等の取り

組みや歴史について概観する。後半では, 落穂寮の「自由画の取り組み」を岡山の論考および当時の近江学園や落穂寮の実践記録を手がかりに発達保障実践の視点から解説する。

1. 障害のある人の芸術の源流として

障害のある人の芸術は「ART-BRUT (アール・ブリュット)」として, 美術内外の関係者や一般に知られるようになっていく。また, 公立の美術館でも作品が収集され, その魅力が全国各地, 世界各国で発信されてきている。そのムーブメントは1990年代に始まり, 2010年前後から, ヨーロッパでの巡回展の開催など, 国際的にも注目があつまっている。

アール・ブリュットについて, 滋賀県立美術館の収集方針をもとにして概観してみよう。

日本語では「生(なま)の芸術」とも訳されるアール・ブリュットは, 1940年代にフランスの画家ジャン・デュビュッフェ(Jean Dubuffet: 1901-1985)が提唱した概念である。主にパリで活動したデュビュッフェは, 自身が同時代の芸術家や文化人らと交流を深める中で, 既存の文化の影響を受けずに独特の制作を行う, 精神障害者や独学の作り手などの作品に心を惹かれ, それらをアール・ブリュットと呼び, 調査や収集を行った。

日本では近年, アール・ブリュットに対する関心が高まってきているが, そのきっかけの一つは, 2010年にパリのアル・サン・ピエール美術館で開催された日本のアール・ブリュット作品を紹介した展覧会「アール・ブリュット・ジャポネ」(以下, ジャポネ展)であった。

ジャポネ展の出展者には, 障害のある人, 特に知的障害のある人が多く選ばれている。この背景として, 同展における日本側の取り仕切りにあたり, 滋賀県社会福祉事業団(現社会福祉法人グロー)を中心とする福祉関係者が中心的な役割を果たしたという経緯がある。パリで活況を呈したジャポネ展以降, 逆輸入で, 日本でもアール・ブリュットが注目を集め, 障害のある人による美術作品が評価を受けるようになった。このなかには, 滋賀県にゆかりを持つ障害者の作品も多く含まれていた。

滋賀県の福祉施設では, 戦後間もない頃から障害児の造形活動に関して先駆的な実践を行ってきた経緯がある。1946年, 糸賀一雄, 池田太郎, 田村一二らにより障害のある児童等の入所・教育・医療施設「近江学園」が大津市南郷に創設される。やがて, 同園では, その土地の良質な粘土を素材とした造形活動が生活指導として取り組まれるようになる。

その後, 落穂寮, 信楽寮, 一麦寮など, 県内の多

くの福祉施設で、主に知的障害のある人たちによる造形活動が活発に展開される。最近では、滋賀県在住で、栗東なかよし作業所に通所する澤田真一の作品が第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ(イタリア:2013)で展示されたり、甲賀市の知的や精神、身体に障害をもつ人たちの表現活動に取り組む「やまなみ工房」が、多くのユニークなアーティストを輩出し、注目を集めたりしている。

日本でのアール・ブリュットの始原は「近江学園に始まる」とされている。その精神は、社会福祉法人が運営を行う「ボードレスアートミュージアムNO-MA」(2004年設立)など、多くの団体・施設・学校に引き継がれている。

本稿で紹介する落穂寮の「自由画の取り組み」(絵画指導)は生活指導の一環として取り組まれているが、初期の障害のある人の芸術活動であるともいえる。その試行錯誤的な実践のなかで見出された障害者の発達の事実は今日にも通じるものである。

2. 岡山喜久治の実践家としての歩みと糸賀一雄との関係について

岡山は、近江学園開設時、すなわち第一世代の実践家である。まず、2007年に筆者が行ったインタビュー³⁾での語りを引用して彼の実践とその背景を概観しておきたい。

「生まれは、1926年、大正14年ですわ。京都で大きくなって、近江学園には昭和23年の4月にちょうど県立施設になったときですね。2年いて、25年の2月に落穂に行きました。その後も、落穂にいて、指導員は僕だけだったので、いきなり主任でした。で、昭和33年8月に名張育成園に行っていますね。それから昭和41年の3月に近江学園に帰ってきて。そして、昭和53年の4月にしゃくなげ園に行った。昭和56年の4月にびわこ学園に行った。で、昭和64年にこだま福祉会に来て、平成2年におおつ福祉会になった。ざっと言うとそんなところや」

この経歴からわかるように、戦後から平成まで、新しい事業や実践の開拓者として駆け抜けた存在である。

岡山は、田村一二とは、学生時代から交流があり、高校生の時に石山学園へボランティアにも通っている。また、生家も隣家であった。岡山は「4月から近江学園が滋賀県立になるが、来ないか」と誘われ、就職する。この時の思い出を「爛漫と咲きほこる桜並木の表坂を、詰襟の国民服にリュックを背負って」登ったと語っている。この頃を振り返って、「(近江学園の日々は)毎日が充実し、実に楽しかった」もので、その青春時代が自分の源泉であったといっている。

着任当初は、障害の重い子どもたち16名が在籍

する松組の担当で、教育については「素人」であったので、熱心に勉強した。そして、カリキュラムを考えるために専門書を読み「少しずつ教師らしくなっていく」。それは「新しい学園を自分たちで作り上げるのだ、子どもたちとの取り組みを通して社会をかえていきたい」という熱意によるもので、この時に実践姿勢が培われ、その姿勢は生涯貫かれた。

岡山は、着任からわずか2年で、開設直後の「落穂寮」(1950年5月1日設立)の運営を保母の初田春枝とともに任されることとなった。落穂寮勤務の後、1958年に「名張育成園」⁴⁾の開設に携わり職員として勤務したが、1968年に初田が急逝し、「近江学園」に戻り県職員として復帰した。県職員としての定年を「しゃくなげ園」⁵⁾で迎える。

定年後は、「びわこ学園」⁶⁾に専門員として5年間を勤務したが、その後参画していた共同作業所づくり運動のなかで、就労支援に取り組む共同作業所の所長になる。勤務していた「こだま福祉会」が社会福祉法人化され「おおつ福祉会」が設立される(1990年)。そして、法人傘下の障害の重い人が利用する通所施設である「唐崎やよい作業所」⁷⁾の所長となる。晩年は「おおつ福祉会」の発展のために尽くす。生涯、利用者や家族との関係を大切にされた人生であった。2022年に96歳で逝去。

以上が岡山の実践家としての歩みの概観である。

本稿は、着任から数年の新任期といって良い頃の実践を記録したものである。岡山にとって手探り(試行錯誤)の時期の実践であるといっていよう。

この時期は、糸賀も、子どもたちの姿から学び、誤りを反省しつつ、自らの考えを発展させている。障害のある人の理解や支援がほとんど確立していない時代であった。

本稿は、現代から考えると素朴な(粹組的な)実践といえるが、近江学園では、生活指導が重視され、「生産即教育」が目指されていた。そこでは、障害の重い人の指導は暗中模索で、生活指導や生産活動の指導方法は確立していなかった。岡山の落穂寮での指導は、異動元の近江学園での経験を援用したものであった。当時の実践には、このような時代的な制約があることを強調しておきたい。

糸賀のことは、「園長室で話を聴くときは、直立不動であった」など、「厳しかった」という話を岡山から何度も聞いた。岡山も「慈父であり厳父」であったと書いている。

糸賀も若き日の岡山の姿を次のように、著書『愛と共感の教育<増補版>』(柏樹新書11, 1972年)に記している。

「岡山先生はその当時長髪でしてね、仕事をしているでしょう。すると髪の毛がぱさつと降りて、時々手で上げるとすつと上がります。これをタダシちゃ

んがモノマネをしたいのだけれども、散切り頭ですからそれができない。私は後で思ったんですけれども、タダシちゃん（寮生）にとって、おそらく一世一代の英知を働かしたことが1つあるのは、ある日のこと、初田先生にタダシちゃんが頼みまして、前の方で日本手ぬぐいを持ってきて、額で結んでくれと言って結んでもらいまして、端っこをタラッと垂らしたわけなんです。それから薪割りをやるんです。パーンとやって、それから勢いよく頭を上げるわけなんです。そうすると垂れているのが後に行くんです。それでようやく心の満足を得たわけなんです」(p.68)。

3. 社会福祉実践史における「ちえのおくれた子どもの作品展」の意義

落穂寮の子どもの作品の歴史的な位置を考えるために、日本における障害児絵画展の歴史を戦前まで遡って、みておきたい。

- ・1938年「特異児童作品展」早稲田大学旧図書館
山下清の作品が知られる。
- ・1939年「精神薄弱児養護展覧会」
日会館ホール・大阪、
『特異児童作品集』出版、(同内容のものが『みづゑ』⁸⁾臨時増刊号として発行)
「特異児童作品展」青樹社画廊⁹⁾
- ・1954年「全国忘れられた子らの作品展」
松坂屋・大阪

まず、障害のある美術作家といえば、多くの人がイメージするのは、山下清であろう。国民に、その印象を決定付けたのは、テレビドラマ『裸の大将』である。毎回のユニークなエピソードは、親しみを感じさせ、旅先などでスケッチをする姿は多くの人の印象に残っているが、このドラマで描かれている人物像はフィクションである¹⁰⁾。しかし、遺されている実際の貼り絵の美しい作品群は、障害のある天才画家としての障害者像をつくりだすものとなった。

山下清は、日本で最初に注目された作家であるが、彼が発見され、作品が知られるためにはプロデューサーの存在が必要であった。山下の場合、美術評論家の三頭谷鷹史によれば、山下清の第一発見者は「明らかに戸川行男（1903-1992）」¹¹⁾であり、最初のプロデューサーであったといっている。戸川は、山下のことを「特異児童」と表現しているが、この用語は造語である。「低脳児、しかも絵がすばらしい。この矛盾を説明する煩を省くために特異児童という言葉が便利に思えた」からである。これは、偏見や差別的な意味合いを軽くするための考え出された造

語である。山下清の絵が注目をあびたことは「美術史上の一事件」であった¹²⁾。

もう一人のプロデューサー的な存在で、山下清を有名作家としたのは、式場隆三郎である。彼は、精神科医で、ゴッホや民藝運動¹³⁾などを広め、日刊紙『東京タイムズ』¹⁴⁾を創刊した人である。

1954年の作品展「全国忘れられた子らの作品展」については、幼児画や原始美術研究者であった宮武辰夫（1889-1960）が『幼児と精薄児の絵が訴えるもの：幼児と精薄児の絵画分析』¹⁵⁾で紹介している。後に、宮武は、落穂寮で絵画指導を行っているが、このことを岡山も特別なこととして語っている。この作品展には、近江学園からも出品されており、職員の増田（後に落穂寮々長）は「会場に一際優れた作品を送ることができたのは流石に学園なる哉（かな）の感を深くした」、「出品物の中でスケッチやメモを取っておいたら良かったと悔やまれるものも数多くあった。又とないチャンスを逃した気がして未だに残念に思っている」¹⁶⁾と記している。

これについて宮武は「少なくとも、世の不幸を背負って生まれた子供達の、涙ぐましい作品に、同情と感心を持って集まった。（中略）悪い誤った壁面には大変な人だかりがあって賞賛の声が沸いているが、正しい、素晴らしい見まもりで伸び跳っている壁面は、極めて不人気で淋しかった」と批判的に記している。その中で、「その壁にある絵を眺めた私は、ハッとした。これこそ、精神構造の特異性の部門を惜しみなくさらけ出させた素晴らしい絵画でもあった。その壁面には、『近江学園』と記してあった。（中略）さらに素晴らしい大きい絵がすじ向こうの壁面に見えた。ダイナミックな逞しさで光っている。これこそ、真の精薄児の作品だ。構造の異なった精神が、そして自分の最も得意な悦びが、壁面いっぱい暴れている。見ると『おちば寮』¹⁷⁾と記してあった。最悪条件下のIQ30以下という子等の作品群だ。よくこれだけやってくれたと、難しい白痴指導に当たった受持の先生達に礼を云い度い気さえ起こった」¹⁸⁾と賞賛している。

このように、山下が天才画家として注目される一方、「忘れられた子ら」としての障害児の絵画作品は「特異性」、「IQ30以下」のもとの作品として関心が持たれ、教育実践としても注目されるようになっていった。

この後、岡山が式場隆三郎に会いに行ったことが、「ちえのおくれた子らの作品展」東横百貨店（東京、1955年）の開催につながる。

4. 「ちえのおくれた子らの作品展」（1955年）の意義

1955年の「ちえのおくれた子らの作品展」は、

岡山が、全国の施設長会議に寮長代理で出席し、その時、自ら式場隆三郎に落穂寮の絵画作品を見せに行ったことから始まる。式場から「これは素晴らしいよ」と評価され、それが「ちえのおくれた子らの作品展」の企画となった。

『美術手帳』（1955年）の特集「ちえのおくれた子らの作品」では、「落穂寮精薄児のえがいた絵」として、23ページにわたり、作者も実名で作品が紹介されている。障害者芸術の研究者である服部正によれば「ラジオやテレビでも紹介され、連日の大盛況だったという。展覧会の成功を受けて、美術出版社は『美術手帖』の臨時増刊として『ちえのおくれた子らの作品』を発行した。展覧会の開催に尽力したのは式場で、指導の当事者である岡山喜久治をはじめとする評論と数多くの作品図版と寮での生活の様子を伝える写真が掲載されている。服部正は、この冊子を日本の障害児の美術教育の歴史を知るための貴重な資料と解説している¹⁹⁾。

以下、『美術手帳』増刊号（1955年）に掲載された「知恵のおくれた子らの作品展」の概要を紹介する。

名 称 「ちえのおくれた子らの作品展」
主 催 社会福祉法人権ノ木会
後 援 社団法人全国精神薄弱児育成会 東京タイムズ社
期 間 1955年3月8日から13日
場 所 東横百貨店7階（長い階段を含む）
作品数 160点 ペンてる（オイルパステル）、クレヨン、水彩画上
展 示 式場隆三郎 岡山喜久治
協 力 新潮社（リーフレット寄贈）
その他 教育相談室の開設（午前10時から17時まで）2室 相談件数 190件（6日間）
教育相談担当者 小林提樹（慶応大学医学部）・三木安正（東京大学）・渡辺実（八幡学園）他、合計28名（ボランティア参加と記載あり）

式場は、この展覧会を「異常な人気」と評している。そして、「それは私の予想をこえて、発展していった。かくて百数十点の作品が、短期間にまたたく間にできたのである。特に指導することは、さけた。大体子どもたちの自由にかかせたのである。（中略）（重度障害の子どもの作品展ははじめてで）迫力のおおきなものはかつてなかったであろう²⁰⁾」と述べている。

展示のコンセプトと評価は、以下のようであった。「（教育困難な重度障害児が）どのようにしてかかる美しい絵をかくまでに上達することができたかを提示したかった。このことについては、岡山君とも

十分話し合った。そこで第一室には最優秀の作品をならべるが、その次には発展の段階をみせることにした。このすばらしい絵をかいた子供も、かつては何もかけず、かいても形さえなかった。（中略）ついにここまで到達することができたという道程を示した」、これが理解され「みる人々の心に明るさを与えた」、来館者が「この展覧会の特質と価値の高さを充分認めてくれた」と式場は喜んでいる。

これまでの山下清の作品展とは違う、障害児の絵画指導の過程や子どもの絵の発達を伝えるものであったといえる。

5. 社会福祉実践史における展覧会活動の意義

今日、障害のある人の芸術については、前述のように2000年代頃からは「ART-BRUT（アール・ブリュット）」と紹介されるようになった。しかし、それが一般美術（インサイダー・アート）として優れた評価であっても、「アウトサイダー・アート」と称されるように、インサイダー・アートとは扱われずむしろ対局的なカテゴリで扱われることは、少なくない、1990年代から多くの展覧会企画に参加してきた、はたよしこは「インサイダー的アートでは、くくりきれないほど魅力があるもの」といっている。

式場も「美術評論家も、美術家も、心理学者も、精神医学者も、この美しさがどこから来るのかを完全に闡明（せんめい）するわけにはゆくまい。しかし、それでいいのだ。世には科学やもろもろの知識をこえて、理由なく美しいものがある」といっている。そして「私は精薄児の中から美術家を誕生させようとか、それを成業にさせようとするものではない。あの清にしても、まだ絵では暮しがたつまい。（中略）知能の活動と諸精神作用の調和と発展を促すために、もっと力をそそがせたい」というのである。「もしそうした仕事の中から、すばらしい作品が生まれたら（その可能性も充分にあるが）、それは思わぬ大収穫となろう。その芸術的・社会的意義の深さを信じる」（下線、筆者）と述べている。

また、1955年の展覧会会場には教育相談室が特設された。式場は「全国各地に見はなされている何十万という不幸な精薄児の救護がいかに必要かを知らせるための念願によるものだった²¹⁾」と強調し、「これら才能ののびかけたものも、不幸にも環境のために停止する危険がある」とも指摘している。また、美術評論家の久保貞治郎は、「精薄児の美術の問題は、大人の純粋な美術分野の問題ではない。それは教育上の問題である。かの清君がいまから、十数年まえ、貼り絵で世間を驚嘆させた時にも、この点は同じであった。すなわち清君の絵の問題は、美

術の分野の問題ではなく、教育上の問題であったのだ、いま新に精薄児の絵が世間の注意をひくとすれば、それはまず第一に教育の問題として注目されるべきである。教育上の分野にあるべき精薄児の作品が、逆説的に大人の美術界に与え貢献する。何というおもしろい現象であろう」²²⁾と述べている。この指摘は、今日も、教育や福祉と美術という関係において展開される実践にも示唆的である。

6. 初期の近江学園における重度障害児の教育実践

近江学園の発展と、重度障害児の課題は大きく関連しているので、簡単に触れておきたい。

近江学園は、1946年に「同胞援護会滋賀県支部」と「滋賀県社会事業協会」を経営母体として出発した。児童福祉法の施行は、1948年1月1日であり、法定外の民間施設となる。その後、1947年2月に、旧生活保護法の適用を受け、認可施設となった。この旧生活保護法には、戦禍による生活困窮者の増大によって、国家責任による生活保護原則や無差別平等原則が明文化された。事実、保護費は8割が国庫負担であった（なお、児童養護施設等の社会的養護における措置費における保護費は、義務的経費であるが、国の負担割合は5割である）。しかし、素行不良者等は対象外であるなど充分ではなく、現行の憲法25条理念に基づく生活保護法が施行されたのは、1950年5月1日である。

このような状況下で保護された児童について、『近江学園報告書』第1集では、1949年5月の保護種類分類では、生活困窮児が56.1%であったが、そのうちに群を抜いて知的障害児が多いことに着目がなされている²³⁾。学級編成においては「・IQ、・生活年齢、・生活能力、・過去に於ける学習の程度、・身体の問題、・学級児童数、・性別」によって編成されたが、この時に、IQのみで見れば「大体、50以下は既に所謂『教育』の対象とならず、むしろ医学的对象として、医師の管理する『白痴院』（仮称）に収容すべきものであって、かくして彼等自身も幸福であり、教育施設も又その能率を増加することが出来よう。施設にはIQ50位までが適当で、70以上80台位までは特別学級収容が適当とされている」とされている。

当初、児童の心理学的な視点からの評価をおこなっていたのは、教育者として心理学を重要視し、学園児童に心理テストを実施していた池田太郎であった。1947年発行の『南郷』第5号で、池田は、6月に「三つのテストの結果に就いて」という報告を行っている。その目的は「全園児の知能程度を知り、それによって、戦災孤児、浮浪児、戦災孤児等の中に含まれている精神薄弱児を選別して、これを

第二部（精神薄弱児の部）に編入することである」としている。

今日でも、筆者の児童養護施設や障害施設での経験からも、福祉や教育分野でのIQ重視、あるいは偏向の傾向が感じられる。本稿での実践は、時代的な制約があるとはいっても、重度障害児を分類処遇し、それが落穂寮の開設へとつながっていったことに触れないわけにはいかない。分類処遇について、1956年4月から近江学園に勤務した田中昌人は「新しく様式学的研究の立場に立って発達研究を行う必要を感じて社会的適応の研究をまとめつつ、研究の方法論的検討を行い、①類型学的研究、②心理学的検査法等がもっている問題」をまとめ批判的に検討している。そして、知的障害児のIQを算出することが、すなわち「普通児との比較対照をすることが行われているが、それらが有効性をもちえない」と指摘している。

池田も、「ただ一種のテスト方法とただ一回のテスト回数によって、被検査者の智能程度を決定してしまうことは危険のことである。（中略）各種の心理テストは教育上の観察や医学的診断と併行してはじめて対象児童の完全なる観察が遂げ得られるものである」（引用は原文のママ）と述べている。

筆者は、池田太郎記念館（社会福祉法人しがらき会）の資料調査で「近江学園研究部」と記され、「昭和二十五年九月起」とあった心理学的評価と推察される学習記録を見つけた。そこには「発達の一般的特質」として、「児童の発達の全期間を通じて二つの要因が働く、即ち、それは成長と学習である」と記され、「多くの作業に於いて、子どもが長じてからの比較的短い期間の練習の方が、年少のときの長期間の練習よりも、いっそう力量をつけるものである」という箇所に下線が引かれていた。これは、池田の学習記録であるが、当時の近江学園では、重度障害者への「他律的な生活訓練」が重要視され、これが検討課題となっていたことを物語っているのかも知れない。本稿の岡山による教育指導方法も、このような当時の近江学園の教育指導につながるものであったといっていよう。

本稿の岡山実践は、このような時代背景を反映しているが、そういった状況にありながらも、数年間にわたる地道な自由画の取り組みによって、障害児の発達の事実が見出されていったことが記されている。

7. 重度障害児と落穂寮の実践

本節では、落穂寮（1948年）の取り組みを考えてみたい。糸賀は、『近江学園年報』第3号（1951年）で研究部の歩みを、職員は「ほとんど解決出来ない

ように見える問題と真正面から取り組もうとしている」と記している。同時に「落穂寮のための章を特別に設けて、学園と一心同体である存在として、貴い約一年間の歩みをここに収録し得ることは幸であった」²⁴⁾と喜んでいる。清水寛は、近江学園のこの時期を「学園の職員全体による教育活動と医局による医療・保健・衛生活動、さらに、研究部を中心とする研究活動の三つが、有機的に結合」²⁵⁾した時期とし、発達保障思想の形成において「組織的な母胎がつくられていった時期」と特徴づけている。田中昌人も「糸賀一雄だけが引っ張るのではなく、近江学園に住み込みの全職員による真剣な討議を前提としていました」²⁶⁾と述べている。

岡山は、「(さくら組)は知能指数で言えば35以下の人たちです。近江学園のねらいは、しっかりとした力を付けて、世の中に子どもたちを送り出して行こうということだったので、150人のうち120人ぐらいは学園の中で努力してたんですが、その30人の『さくら組』は別の生活をしてたんです。重い子どもたちがみんなと一緒にやるのは無理だと、独立した施設を作ろうじゃないかということで、糸賀園長と相談²⁷⁾」したと語っている。

落穂寮は糸賀と小説家であり、初代寮長となった齋藤甲花(本名、齋藤謙蔵、1877 - 1950)により、趣意書や設立の経過がまとめられている。その「精神薄弱児施設『落穂寮』の誕生を見るまで」には、「一つは精神薄弱児のうち、特に重症な痴愚や白痴の子等の問題である。成人しても五才か六才位の知能しかもたない、いわば『永遠の幼児』ともいえるべきもので学園の中で現に非常に特殊な存在でその他の精神薄弱児とも質的に区別せねばならないこと、そればかりでなく、将来社会生活は不可能であろうということであって、どうしてもこれらのために、いわば白痴院とでもいったものを設置して、生涯の保護をしてやらねばならぬという点であり、二つには、学園で育った子供達のうち白痴でなくても、成人して社会に家もなく親もなく、働く職場もないという場合に、それらの青年たちが何とかして社会生活が出来る様に保護をしなければならぬ」²⁸⁾というものであった。

これらについて、清水は、糸賀が重度障害児を「永遠の幼児」と「『独立自活に必要な知識技能』に達することはできず、それを求めることは『理想ではなく空想であり、然らずんば無知の所産であると断ぜざる得ない』と、分類処遇の考えにあったことを批判している。これは、「(近江学園の)自立自営の方針のなかで『職業的提携への陶冶』に収斂させていった」²⁹⁾ことが要因であると指摘している。また、渡辺実(八幡学園)も『美術手帳』(1955年)掲載の論文で「『精神薄弱の人とはどんな仕事ができますか』

と(よく聞かれるが)、この意味は社会に生産者としていかなる寄与をしているとのことである」³⁰⁾と書いている。

この「障害の重い子どもたちにたいする伝統的・支配的な能力観・発達観を脱却し、重度障害児の発達観を変えていった」のも、近江学園や落穂寮での「自由画の取り組み」の実践である。

8. 落穂寮における自由画の活動

開設時の指導の根本は「出来る丈他人の手を借りずに、身の廻りのことを、自分で処理し得るように訓練し、之を習慣化する所まで行うことにある。この意味に於て、彼等の生活全般が教育内容と云っても過言ではなく、朝を起きてから、夜床につくまで、総て生活訓練なのである」³¹⁾と述べている。

岡山の絵画指導は、今日的には、「生活指導」の一環であり、くり返しと「他律的で、時に強制さえも必要である」というように訓練的に捉えられるかも知れない(p.47)。しかし、田中昌人が「発達過程にこそその特質があらわれるのであるにもかかわらず、発達過程把握は普通児のそれすら充分になされていないので、そのことが精薄児教育を考えていく場合に非常に障害になっている」³²⁾と指摘しているように、「(普通児の)発達過程把握も充分になされていない」という大きな時代的な制限もあった。しかし、「自由画の取り組み」は、「彼らにも成長の芽生えがあり、大ていが教育可能で、彼らなりの生活の向上が期待できる」と、子どもの発達に目を向け、その指導の糸口を見出そうとしていることに注目すべきであろう。

具体的に「自由画の取り組み」の実践をみていこう。

岡山は、笛を吹けども集まらずで「全然まとまりがないんです。『集まれ!』って言っても集まって来ないんです」と開設の苦勞を語っている。

ここでは、初田の『近江学園年報』第5号(1953年)の報告を手がかりに検討してみたい。

〔自由画の取り組み概要〕(「寮に於ける自由画の考察」³³⁾ 初田春枝より要約)

状況…開寮当初、寮児は落付き(原文ママ)を欠き、何事にも長つづきしなかったので、生活訓練の一環として、一定時間の仕事に注意をさせる習慣をつけるため

時期…1950年から3年間

対象…IQ40以下の子ども

画材…クレヨン12色 画用紙(八つ切り)

1年目…10時00分（朝のおやつ後）机の前に座って描かせる。全然興味をもたぬ子どもと、最初から興味をもっている子供とがあった。半ば強制的に描かせていた。直径7cmの円経のぬりえを毎日行う。
2年目…学習時間形態で取り組む。出来るだけ多くの作品を貼りだす。絵を貼る遊びがはじまり興味を持つようになり、なぐり書き（ママ：描き）の子ども、自分で貼っては手をたたいて喜ぶようになる。一枚ずつ批評をすると、自発的になおし、また続けて濃くぬるようになった。持続時間が30分位となった。
3年目…子供から進んで描くようになり、何時でも描き、画用紙の全面にぬりまくる様になった。自由時間にも描かせるようにした。＊この頃より、色彩が濃厚になり、二色も三色も根気よく塗り重ねる様になった。全体にみて大変喜んでいいる様子が伺われ、学習効果が望める。

岡山は、当時を次のように振り返っている。

「初田先生は絵が上手だったんで描いてもらって、印刷して子どもたちに渡すんです。それにいろいろと色を塗ってきます。『ここはこんな色、ここはこんな色』って言っているうちに、だんだん分かるようになってきて、その後はだんだん紙を大きくしていきました。折り紙A4ぐらいにして、A4がある程度埋まるようになってきたらA3の大きさにする。それでだんだん慣れていくわけです。その時に僕は、子どもたちに潜んでいる力がすごくあるんだなと、私たちはそれを引き出していく方法をしっかりと学んでいかなければいけないなということを非常に感じました。（中略）そうして紙を渡しておくと、A4ぐらいの大きさで素晴らしい絵を描いてくるわけです。これは僕らが指導するべきではない、「みんな好きなように描きなさい」というふうにしました。それで、A3から今度はその倍の大きさ、模造紙の1/4、半分、全紙を渡しました。描く材料も、クレパスから絵の具にしたり、マジックとかいろいろのものを渡したら、どんどん素晴らしいものができました」³⁴⁾（下線は筆者）。

初田も「出来る限り児童に無理のない限りよい環境にしてやるのが大切である。（中略）最初15分と続かなかった学習時間が、訓練も影響し、児童の興味の高まるにつれて現在では1時間以上も持続することになった。これによると完全に生活におけるレクリエーション的な役割を果たすようになった」と記している。そして「絵の指導については、描くことは教えるはいけませんが、それでいて又、教えるなければならぬ面がある。何が教える悪いことであるかを、はっきりみきわめることが必要である。子供の個性をのばし創作欲を助長する様心がけ、生活指導

を行わなければならない」とまとめている。

この「教えなくても良い」という実践は、同時代の粘土活動にも見られた。それは、子どもを主体者として尊重する取り組みであり、子どもの自発性（発動機がかかるのを待つ）を見つめた実践といえるのではないだろうか。

糸賀は「社会的な抑圧は、自信の喪失を招き、臆病にし、怠惰におこむしかない。（中略）自信は成功感と同義語である。造形的な作業の中でつみ上げられる一つ一つの成功感は、彼等に自信と安心と誇をすら感じせしめるのに役に立つのである」³⁵⁾と述べている。

自信と安心と誇りを育てる造形活動の原型が、近江学園や落穂寮に育ちつつあったといえる。

9. おわりに

以上、概観してきたように、落穂寮の絵画作品は、生活訓練（生活指導）に位置づけられるも、持続的な教育的な関わりが重視され、「発達に働きかける」ことによって生み出されてきたといえる。一方で、重度障害児を発達可能態と位置づけて取り組むには、まだ大きな時代的制約があった。

当時、久保貞次郎は、「彼らの力がこもった幼児的な絵は、よく見ると成熟した感情がかくされている。（中略）精薄児の知能の発達には制限があり、おくれているも、感情的にはある成熟をとげていくらしい。その成熟さが、迫力となって画面に表される。」と評しており、また、日向弘済学園々長だった花岡忠男は、「彼らとしても人間である。美を美とし、真を真とする世界には、何らの抑制も差別も役に立たないのである。これは痛快なことである。人間礼讃のこの上ないあかしを、この展覧会をみる者に与えずにはおかぬものがある」といっているが、まだ発達過程や教育過程を科学的にとらえた評価ではなかった。

岡山も「生活経験が豊かに内容的になってゆくにつれて、絵も進歩して来た」(p.45)といっているが、これは、絵画指導をはじめとする滋賀県での造形活動で大切にされてきた「生活が作品（表現）に表れる」ということであり、「（大人にとって）よい作品づくりを教える」ものではなく、「生活（発達）の充実が、表現のゆたかさになっていく」ということが、試行錯誤の取り組みの中からわかり出したことを表しているといえないだろうか。

筆者は、障害のある人の作品が美術としての評価を受ける時に、それ同等に、その作品を生み出すまでの教育実践や社会福祉実践も価値あるものとして大切にされることを願う。

謝辞

社会福祉法人榎ノ木会落穂寮の太田政則寮長には、資料調査のご協力を頂いた。厚く御礼申し上げます。

最後に、岡山喜久治先生は2022年に96歳で天寿を全うされました。近江学園の創立時より、生涯を障害のある人や家族に尽された人生でした。謹んでご冥福をお祈りし、私たちに、実践を通して多くのことを教えて下さったことに、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 美術手帳のホームページおよび解説(原田裕規)は下記を参照。https://bijutsutecho.com/artwiki/39. 2024-9-30 現在
- 2) 既存の美術教育を受けていない人たちの作品で、加工されていない生の芸術。フランスの画家ジャン・デュビュッフェ(Jean Dubuffet 1901-1985)によって提唱された言葉。
- 3) 2007年1月15日『滋賀における障害者の造形活動に関する調査研究報告書』(2009年)、筆者とのインタビューより
- 4) 1958(昭和33年)全国精神薄弱者育成会により、全国最初の成人施設として開所。何もないところを開墾して始められた。岡山は、その苦労は大きかったと語っている。糸賀から命じられて着任。
- 5) 滋賀県立の主に就労支援に取り組む知的障害者入所更生施設であった。施設の地域移行により2008年に閉園し、事業は滋賀県社会福祉事業団(現社会福祉法人グロー)に引き継がれた。
- 6) 園長の岡山英彦より請われて5年間、専門員として研修活動などを担当する。(妻、岡山英子氏による。2022年聞きとり)
- 7) 共同作業所づくり運動に携わり、無認可共同作業所である「大津はばたけ共同作業所」所長を勤めた。1991年5月に養護学校を卒業する障害の重い人のための施設として開所。
- 8) 戦後を代表する美術総合雑誌の一つ。1905年創刊。
- 9) 銀座の老舗画廊。1939年12月開催。来場者2万人。
- 10) 『裸の大将』はテレビドラマ上の演出で、旅先で貼絵やスケッチを描いたのではなく、八幡学園に帰ってか、記憶により貼絵にしていた。
- 11) 三頭谷鷹史(2008)。「1938年特異児童の美術界デビュー」。『宿命の画天使たち 山下清・沼祐一・他』。p.47
- 12) 服部正 藤原貞朗(2014)「山下清と昭和の美術」。『特異児童』清君のデビューをめぐる喧騒 昭和10年代前半。pp.58-59
- 13) 1926年に柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司らによって行われた提唱された文化運動で、華美な美術品だけでなく、「美は生活のなかにある」といわれた。岡山は、河井などと同席するようなことがあったと話している。
- 14) 1946年、日刊新聞(首都圏)として「東京タイムス」を創刊。式場隆三郎の略歴は下記を参照。

https://www.city.ichikawa.lg.jp/library/db/1003.html 2024-9-30 現在

- 15) 宮武達夫(1955)『幼児と精薄児の絵が訴えるもの：幼児と精薄児の絵画分析』黎明書房
- 16) 増田正司(1954)。「忘れられた子等の作品展を終えて」『南郷』近江学園、第14号、p.34、タイトルは省略されており、原文の開催時期から「全国忘れられた子らの作品展」と推察される。
- 17) 原文ママ。おそらく、ひらがなで表記されていたと思われる。
- 18) 前掲15)
- 19) 服部正は、落穂寮作品調査プロジェクトに取り組み、落穂寮で昭和30～40年代に寮の利用者によって制作された絵画作品の調査を行って、採寸、撮影した作品リストと作品画像を550点を公開している。https://tadashi-hattori.com/research_cat/project01/ 2024-9-30 現在。
- 20) 近江学園の後に訪れた落穂寮で作品に感銘し、「べんてる」の寄贈を依頼し、大作の制作を計画。される。その作品には「驚嘆」したと賞賛している。
- 21) 式場隆三郎(1955)。「知恵のおくれた子らの作品展の記」。『美術手帳』第95号、p.72
- 22) 久保貞次郎「彼らの絵」『美術手帳』第95号、p.63
- 23) 近江学園、pp.46-48
- 24) 糸賀一雄(1951)「まえがき」『近江学園年報』第3号、ページ数の記載なし
- 25) 清水寛(1981)。「近江学園の児童福祉施設としての発展の時期区分」『発達保障思想の形成』青木書店、p.165
- 26) 田中昌人(2003)。「今日における発達保障の理論と課題」『障害者問題研究』全国障害者問題研究会出版部、第31巻、第2号、p.91
- 27) 岡山喜久治(2016)「福祉教育開発センターシンポジウム『平和と福祉』事前学習会 座談会『戦後70年を駆け抜けたソーシャルワーカー』～岡山喜久治氏からのメッセージ～」『佛教大学福祉教育開発センター紀要』第13号、p.12
- 28) 落穂寮前寮長であった増田正司が旧ホームページに記載しているものを、落穂寮において原本を調査し、確認した。(2025年10月)
- 29) 前掲21) p.200
- 30) 渡辺実(1955)「落穂寮の子供の絵を見て」。『美術手帳』第95号、p.68
- 31) 落穂寮(1951)。「寮児の生活」。『近江学園年報』第3号、p.257
- 32) 田中昌人(1958)。「子供の発達課程の把握」『南郷』近江学園、第19号、p.2
- 33) 初田春枝(1953)。「寮に於ける自由画の考察」『近江学園年報』第5号、p.237
- 34) 前掲25) p.14
- 35) 糸賀一雄。(1955)。「精神薄弱者と美術教育」『美術手帳』第95号、pp.64-65